

「本学校園の幼小中一貫教育」からの提起をめぐって

本年7月30日に参加した「小中一貫教育全国サミット」は、2006（平成18）年に品川で第1回目が開催されて以来、5回目のサミット開催であった。一貫教育は教育改革の一つの試みであり、一貫は目的ではなく、あくまで手段に他ならない。では、改革の未来に、一貫教育の実現の先に何が見据えられるのか。

それはやはり素朴で単純な原点として、どのような子どもを育てようとするのかであろう。

求める子どもの姿を実現するために、従来の「幼稚園」、「小学校」、「中学校」といった枠組みではできなかったこと、できにくかったことを、できるようにしようとした学部との連携強化を含めての組織的な改革の試みの一つがまさに「幼小中一貫教育」であり、一貫教育によって何ができるのか、何をすべきか、あるいは何がしたいのかを問い、模索し、具体的な取り組みを重ね今日に至っている。

それは一貫教育がまだ、それほど広く認知されていない段階で、しかも幼稚園を含めて進められてきた一貫教育は、実験校としての附属ならでの試行であるともいえる。

本附属学校園の幼小中一貫教育の取り組みとして、今後どのような方向性を基本的に提起していくのか、全国の動向やその成果を視野に入れつつ、改めてそのありようについて考えてみたい。

本附属学校園の一貫教育を進めていく上において、その基本的な方向性を示すものとして報告書『島根大学教育学部附属学校園一貫教育のあり方について』（平成18年9月 島根大学教育学部改組検討WG）が作成されている。それを手がかりとしながら、掲げられた育てたい子どもの姿や基本理念、基本目標について筆者なりに確認しながら述べていきたい。

この報告では＜育てたい子どもの姿＞として、次の3つの姿が策定された。

「○新しい時代を切り拓き、社会に貢献しようとする子ども

確かな知識を基盤とした優れた判断力・行動力を持ち、協働して豊かな社会の実現に果敢に挑戦しようとする。

○豊かな感性を育み、創造的に探究し続ける子ども

人や事象の持つさまざまな価値や本質をイメージ豊かにとらえ、知的好奇心をもって学び、探究し続けていこうとする。

○人とのかかわりを大切に、共に伸びていく子ども

自他のよさと可能性を尊重し、支え励まし合いながら、よりよい人間関係と自己の伸長を図っていこうとする。」

第1番目の子どもの姿は、時代と社会とを見据えた人材育成の観点から示された内容であるといえる。新しい時代を切り拓く。社会に貢献しようとする積極的な意欲と行動力をもって、豊かな社会の実現のためにさまざまな分野で、さまざまな形で他と協働しながらそれに挑戦しようとする、そのように生きようとする人材を目指すものであろう。では、ここで想定されている「新しさ」や「豊かさ」とは何か。例えば、真に安全で安心して暮らせる社会、未来に拓かれた持続可能な社会、地球規模での環境と生活とを熟考した社会などを挙げるができるが、重要なことは地球規模で、社会生活の上で求められる「新しさ」や「豊かさ」とは何かを問題としていこうとする前向きな意識や感性と、それを自分なり考え抜き、共に考え合い、討議し協働してそれに取り組んでいこうとする姿だといえる。

第2番目の子どもの姿は、主には学力形成・学習意欲の育成の観点から示された内容だといえる。第1番目にも述べられている確かな知識を基盤とすることは言うまでもないが、知識を知識としてのみ習得するのではなく、一方において知識が文化的・社会的文脈においてどのような意味や価値を持ち、その本質とは何かを、常に問い続けようとする「知的飢餓感」を抱きつつ、他方で知識を知的・論理的な側面だけからではなく、そこから広がる、あるいは広げることのできるイメージや感性と結びつけてどれだけ豊かに膨らませることができるのかということであろう。教科書知や受験知を越えて求めていこうとする、奥行きのある骨太な知のあり方を模索するものでもあるといえるのではない。

第3番目の子どもの姿は、主には人間関係、人間性の形成の観点から示された内容だといえる。ここ

での主な柱は十分な自尊感情（自尊意識）・他尊感情，応答的なコミュニケーション能力の育成を挙げることができる。自己を真に大事にし，自己の価値を尊重する感情や意識は，孤立し孤独な空間において自己を大事にし，その価値を偏狭に尊重することでは得ることはできない。基本的には人とのかかわりを通して，自他のよさと可能性を実感することをおいてほかにはありえない。そのことをさまざまな活動や場面を通じて学ぶことにほかならない。人とのかかわりを大切に，他を大事にし尊重するよりよい人間関係の中で，必要な協力や支え合い，励まし合うことで自己の伸長を図っていこうとする子どもの姿であろう。もちろん，それは決して容易な事柄ではない。こうした人間関係はある意味で最低限の要求であると同時に，最高に求めつけられる要求であるともいえる。だからこそ，育てたい子どもの姿として掲げられていることの意味合いがあると考えられる。

こうした「育てたい子どもの姿」を目指して幼小中一貫教育の基本理念および基本目標として以下のように集約されている。

<基本理念>として「幼稚園・小学校・中学校の共同による一貫した教育によって，次代を創造していく優れた人材を育成する。」すなわち，「子どもたち一人ひとりが，自ら考え行動していくことのできる自立した個人として，心豊かにたくましく生き抜いていくことができるよう，幼稚園・小学校・中学校が共に力を合わせて，一体となった教育を行う。」

<基本目標>として

「○確かな基礎的な学力の定着と高度な応用力を育み，自ら学び自ら考える力を伸張する

○健康な心身と豊かな人間性を育み，よりよく生きようとする意欲と態度を伸張する。」

意味内容として上述したものと重なる点もある。特に重要なキーワードとして，次代を創造していく「優れた人材」の育成，「自立した個人」として生き抜く，「高度な応用力」の育成をあげることができよう。このような子どもの姿，基本理念，そして基本目標の実現を目指して，現在，具体的な取り組みがなされてきている。（『平成21年度島根大学教育学部附属学校園研究紀要』平成21年11月参照。）

今後の取り組みや検討課題として，とくにあげるとすれば，一貫教育の成果をどのように提示していくかといった事柄のほかに，簡単な指摘に留まるが次のようなものをあげることができるのではないかと考える。

①学力の質としての「高度な応用力」とは何かとその育成

育てたい子どもの姿では，その重要な核となる学力形成に関して確かな基礎・基本の定着があるのはいまでもない。附属学校園が一貫教育において，提起するそれは何か。学力に関してやや極端な言い方が許されるならば，「学力」の育成が従来からのままでいいとすれば，一貫教育にする必要性は半減する。私見を述べるならば，教科内容における概念や原理，法則，構造等の本質や意味がきちんととらえられていること，またそれに至る「問い」と「思考様式」が適切であるということ，そしてどのような問いを立て，条件や情報を取捨選択して，どのように考えることが物事の本質を捉える「方法」として，問題解決に至る「筋道」として有効なのかが構造立てて考えられることだと考える。

②一貫の見通しの中での育ちと振り返り

一貫することで，近い将来の子どもの育ちをその視野に入れることになる。その育ちの中に看取ることのできる成長の姿と課題をとらえ，それらの萌芽を現在に探り，そこから振り返り，新たな見通しとともに子どもと向き合っていく。そうすることで一層望ましい自他関係を中心とした人間形成の質的向上，自己伸長へと向かうことになるのではないかと考える。

③「異校種教員による保育・授業研究会」の「公開」

①ともかかわって附属からの提起として保育・授業の公開とともに学校園間相互，異校種教員相互での「保育・授業研究」の「公開」を行っていくことが考えられる。それは自分たちの「保育・授業研究」を「公開」して，違った角度から一貫教育推進のあり方を問いかけるものになるのではないかと考える。

異校種の教員同士が自分たちの保育・授業を，また幼児・児童・生徒の成長をめぐる，意見の交換を行い議論し合うことは，一貫教育の内実をより豊かにしていくことにつながっていくものと考えられると同時に，それを通じて異校種教員間にそうした検討・研究を行うことのできる関係を築いていくことが一貫教育をさらに推進させていく一翼を担うことにつながるものと思われる。

（附属学校主事：島根大学教育学部初等教育開発講座 権藤 誠剛）